

# 本願寺史料研究所報

35号

発行所 本願寺史料研究所  
〒六〇〇一八二六八

京都市下京区七条大宮上ル  
龍谷大学大宮図書館内

電 話 ○七五一三四三一三三二一  
内線(五四一八)

発行者 所長 赤松徹真  
発行日 二〇〇八年九月三十日



## 《卷頭言》

### 千葉乘隆前所長を悼んで

本願寺史料研究所所長 赤松 徹真

千葉乘隆先生は、去る四月十二日に往生された。廣開院釋乘隆、八十八歳であつた。本葬は五月二十七日、自坊安樂寺で執り行われた。

千葉先生は、一九二一（大正十）年五月四日に徳島県美馬町、浄土真宗本願寺派安樂寺で誕生し、戦中の一九四四（昭和十九）年に龍谷大学文学部を卒業して、一九五〇（昭和二十五）年に龍谷大学研究科を修了した。その後、親鸞聖人七百回大遠忌の事業に係る本願寺史編纂所の開設にともない、一九五七（昭和三十三）年編纂委員となり、一九五九（昭和三十四）年に文学部講師に就

任、一九七〇（昭和四十五）年に文学部教授、一九七三（昭和四十八）年に文学部長、一九八三（昭和五十八）年には龍谷大学長に就任し、同年には本願寺史料研究所所長にも就任した。学長職は六年間務め、一九九〇（平成二）年に国際仏教文化協会理事長、一九九二（平成四）に浄土真宗教学研究所長、一九九五（平成七）年に相愛学園理事長を歴任し、この間、矢継ぎ早に重責を果敢に遂行された。

とりわけ、本研究所に関わり、開設当初の重要な事業であった、「本願寺史」の編纂、刊行にあたつては第二巻を中心に執筆し、また、真宗の地域社会への定着過程を史料調査を繰り返し取り組みながら明らかにした「中部山村社会の真宗」や、史料編纂として「本福寺史」「本福寺旧記」「興殿諸記」全三巻などを、共編には「日本庶民生活史料集成」第一八巻、「真宗史料集成」全一〇巻、「本願寺文書」「蓮如上人御文」など多くを刊行した。

研究書のみならず、多くの人びとに親みやすく執筆した『本願寺ものがたり』『蓮如繪伝ものがたり』『顕如上ものがたり』『蓮如上人がたり』『親鸞聖人ものがたり』などを刊行した。先生の厖大なご業績は、寸暇を惜しんで机に向かつて研究・執筆に専念された親鸞聖人以降の真宗の歴史叙述や史料調査に基づいた史料集の刊行であった。

今日までの四半世紀の本研究所は、千葉先生のもとで運営され、内外から高い評価を得てきたのであるが、先生き後、私たちは、本研究所の所掌事項、すはわち、「総局部門宗務組織規程施行条例」第二章の二の第八条の三として記されている

一、本願寺関係史資料の収集、整備、編纂および保存

に関すること

二、本願寺関係史資料の分析、調査、審議、研究成果

の発表に関すること

三、宗務機関等の要請による法寶物類、古文書その他

史資料の調査、研究に関すること

四、大学等の学術研究機関との連絡提携に関するこ

五、前各号のほか、本願寺関係史資料について必要な

こと

を再確認するとともに、それらの業務に取り組み、同時に来る二〇一一年(平成二十三)年に迎える親鸞聖人七百五十回大遠忌の事業として計画されている『本願寺史』改訂版、『親鸞聖人余芳』などの刊行をも遂行しな

ければならない。

また、研究所の諸課題としては、広報としてホームページ開設や所蔵・収集史料の刊行、真宗史料の寺院・地域など調査の事業計画とその実施、史料の公開・閲覧、さらに文書等のデジタル化を通して一般に公開するデジタルアーカイブ化の推進などをあげることが出来る。そのことにより本研究所は、宗門内外からの新たなさまざま

みなニーズに応えることが出来る。一方ではそれらの増大する機能・業務に的確に対応できる企画・運営体制を整備することも重要である。

近年は、公文書等の適切な管理、保存、利用について等、市町村合併や情報公開法、諸外国との比較を背景に精力的な検討が始まり、府・県・市等においても公文書管理規則などが施行され、福田康夫前首相のもとでの公文書館管理の在り方に関する有識者会議が中間報告を提出している。これらの動向は、宗門に即するならば宗門の近現代史に関わる行政文書の適切な管理、保存、利用等にも関わる体制整備などの課題にも直結している。

宗門は本年四月に六十数年ぶりに新たな宗制を施行したが、本願寺史料研究所が宗門の歩みの実態を伝える史料を宗門に関わる人びとと共有する場として機能し、さらに広く人びとも開かれた役割を果たすことが求められている。今後の研究所についての諸課題の一端を記して、引き続きご指導、ご支援をたまわりますようお願い申し上げる次第である。

## 本願寺御家中衆次第について（二）

太田 光俊

川那部主馬 寛永十四年七月十七日往生  
横田内膳

川那部市丞

細江主計 寛永十六年八月廿日往生  
八木長門

八木隼人 寛永十六年正月十五日往生  
七里九郎左衛門

横田玄蕃 「私云監物勝」  
長ノ父也

八尾李之助 寛永十四年三月三日往生

川那部勘解由

横田左近 寛永十六年正月八日往生

池尾主水

芝田三太夫

富嶋三郎左衛門 「重武」  
ノ父

上田助進

「私云織部」

嶋田讚岐

「私云嶋田基丞」  
正信ノ父  
勝友ノ祖父

村井市左衛門

中村壱岐

松井作左衛門

（挿み込み断簡）

「勝素ノ父」

「私云李允」

### 《史料翻刻》

良如様御代

「此卷ニ年号無之、但寛永十一年ヨリ已後ノ書加ヘアリ、  
良如様御代トアレハ寛永八年ヨリ十年迄ノ間ナルヘキカ」

御通之次第

「以他本考ニ、此次第八寛永十三丙子正月十三日御通之次第  
也、御不例衆延行ナリ、池永善之ハ寛永十四春マテ存生と  
ミヘタリ、十一年卒去僕事実之アヤマリナルヘシ、寛永  
十二年元日之次第も同事也、但加進候時ハ法橋ニアラス候」

下間刑部卿法眼

「私云秉及  
仲此ナリ」

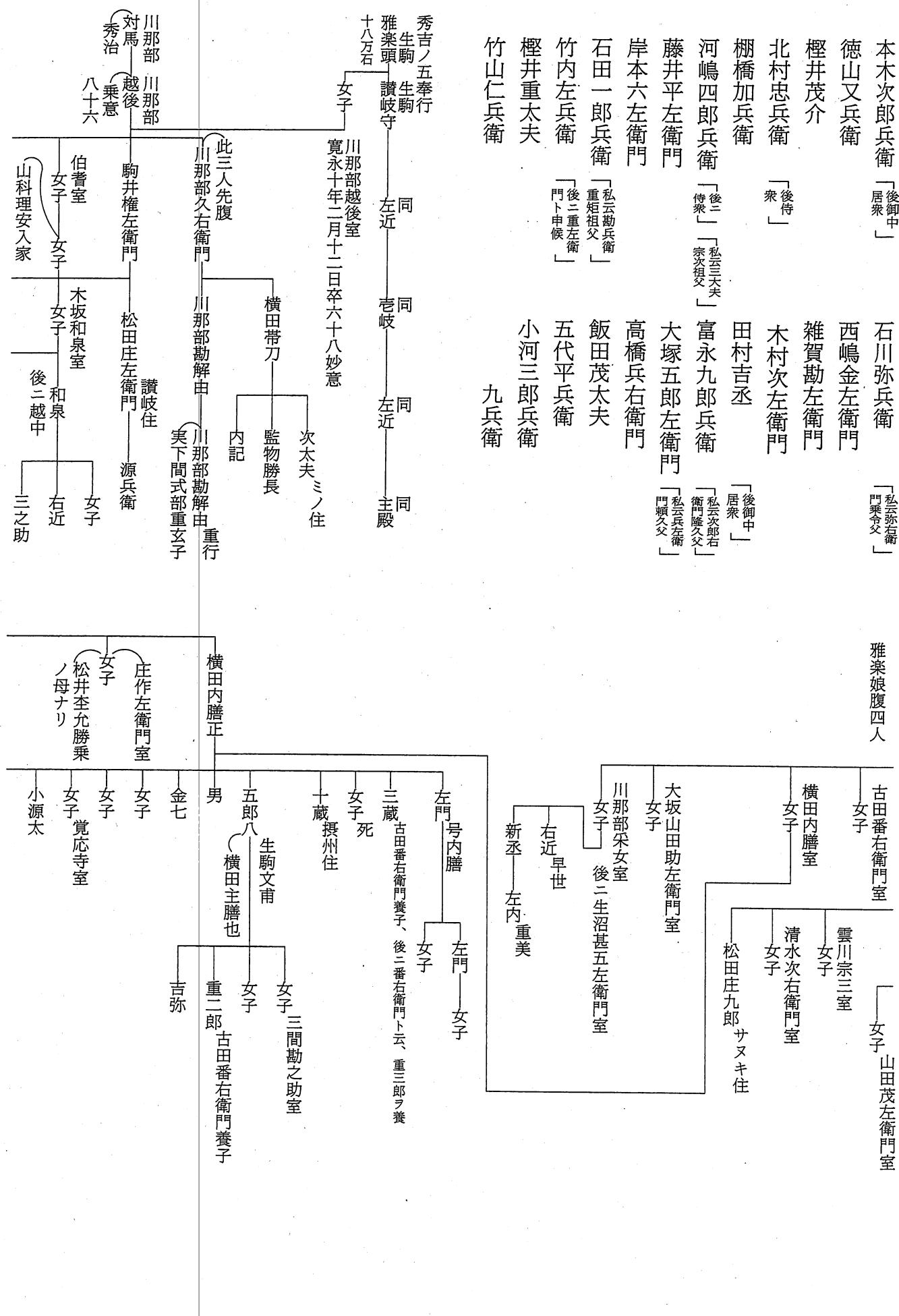
下間大進

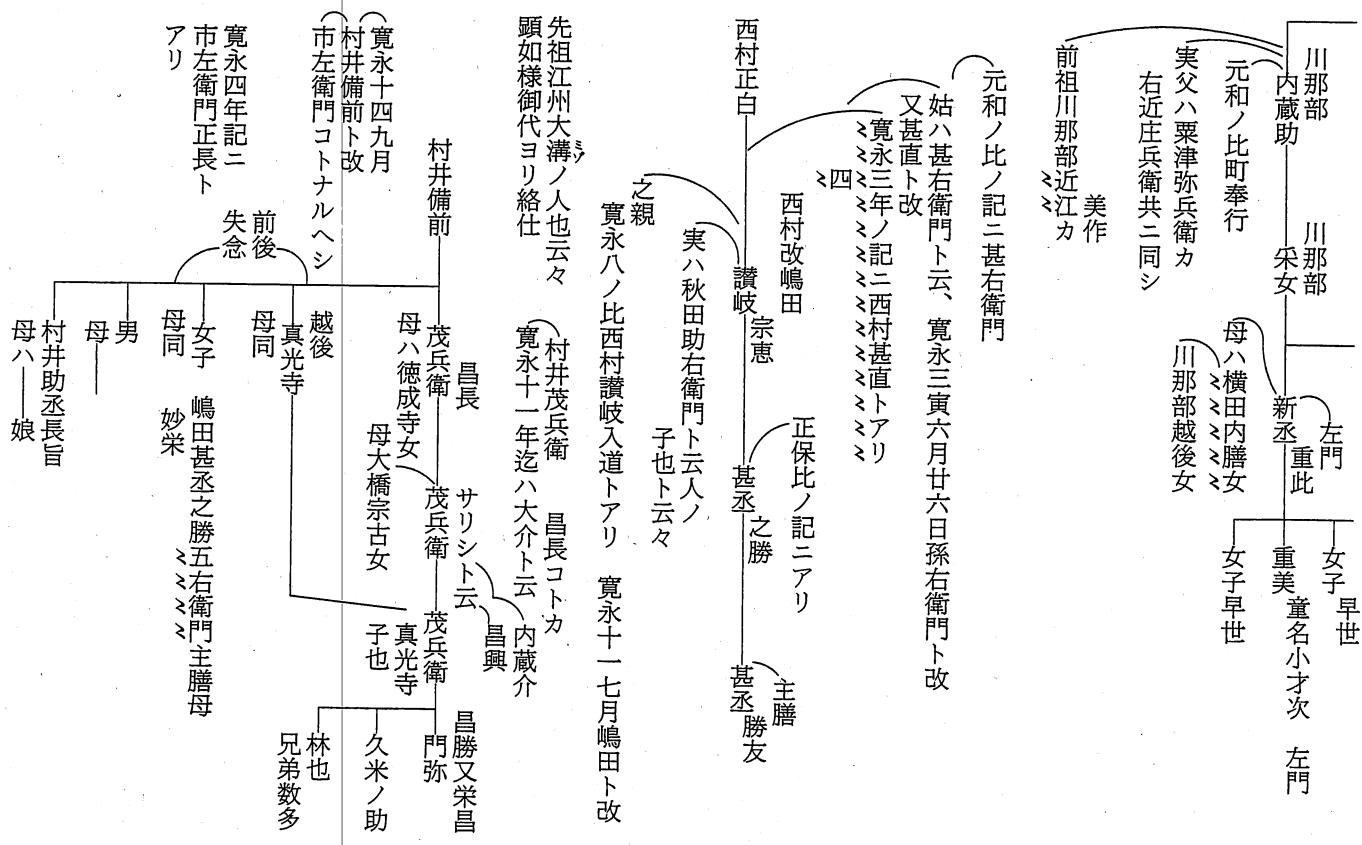
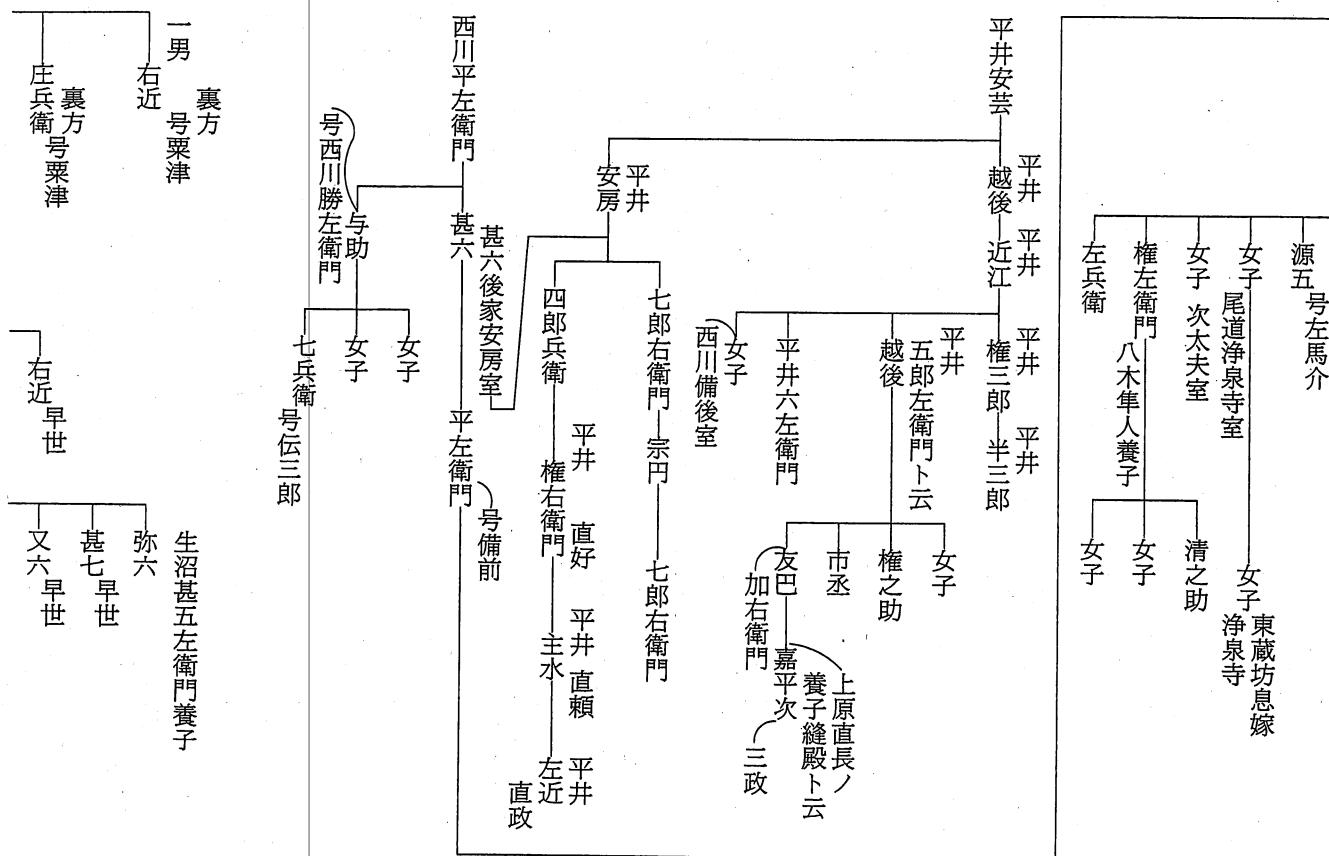
「私云仲  
友也」

西川勘右衛門

富島下総 寛永十四年往生

中村久左衛門	八木伊折 〔隼人〕
里村弥次右衛門	受斎 久円 范阿弥
小泉助丞 寛永十六年七月往生 「私云小泉」	已上
池長善兵衛 寛永十一年往生 「采女ノ父」	
下間大式	御通リニ不出衆
矢嶋文右衛門 「寛永十四年二月廿六日往生」	下間民部卿 「寛永十六年正月ヨリ寺・覺應寺・正勸・金宝寺以上六人アリ」
平井権右衛門 「寛永拾六年父ノ座敷御免」	池尾主殿 「寛永拾五年十一月八日山本御免成御通ニ出ル」
中村小右衛門	上原長九郎 「上原掃部子也」「記三治也」
池永作十郎	宇野庄太夫 「私云池外直長也」
平井半三郎	嶋田甚丞 「私云兵庫記三治也」
生嶋内匠	横田左吉 「御暇被下候」
丹下久太郎	村井茂兵衛 「御暇被」
西川伝三郎	里村左太郎 「御暇被」
伊藤一学	芝田茂左衛門 「御暇被」
八木長左衛門 「寛永十六年正月ヨリ八木与十郎座敷御免」	上田長次郎 「進子也」「私織部」
松井庄十郎 「松井作左ノリ素也」	西川次郎九郎 「中村庵正信也」
柳田長吉	西川長次郎 「上田助之」
横田左馬	中村吉内 「中村庵」
八尾長五郎	高山半十郎 「勘解子」
八木虎助	川那部内記 「勘解子」
竹山九右衛門 「後侍」	綱所衆
小寺庄右衛門	
八木伊折 〔隼人〕	
受斎 久円 范阿弥	
古キ御堂衆次第二願入寺・光永寺真宗 寺・覺應寺・正勸・金宝寺以上六人アリ	
寛永十年御家中次第二光行寺ナシ、淨照坊ナシ、明延ナシ、光瀬寺・專光寺間ニ蓮照寺アリ	
寺・覺應寺・正勸・金宝寺以上六人アリ	
本専寺 光行寺 光慶寺 金宝寺 西宗寺 專修寺 光瀬寺	
西覺寺 淨照坊 延寿寺 正光寺 宝泉寺 慶崇寺 明延	
寺・延壽寺・金寶寺・教哲・西宗寺・專福寺・照普寺・寶泉寺	
照寺	
正鑑 「私金剛寺」	
〔私云比ノ次第、本専寺・光行寺・光慶寺・西教寺・西覺寺・專福寺・照普寺・寶泉寺〕	
早崎八右衛門 「私云八郎兵衛父」	
廣沢多兵衛 「私云枝」	
九鬼佐左衛門 「私云枝」	
田中六丞 「私云枝」	
樺井平丞 「私云枝」	
小寺庄右衛門 「私云枝」	





細川同家ノ由 松井佐渡守ノ弟 初テ御家へ奉仕	松井出雲守 但馬 又左衛門 右 作左衛門 言勝	寛永十一年迄八庄名字也 ソレヨリ松井ト改
頤如様御代 如春様入輿ノ節御家へ 初候ノ由也	右 作左衛門 言真トアリ	寛永四年記二 言真トアリ
主計座敷御免 細江内匠	正保四丁亥歲元日 御前衆御通出座之次第	寛永四年記二 言真トアリ
八木藏人 横田内蔵助 山本主殿助 川那部勘解由 八木長左衛門 平井權右衛門	下間民部卿法橋 同 大進法眼 川那部主馬 同 市之丞 周 定繼 長仍 定武 元重	仲虎 少進法眼 仲此 仲友 「慶安三寅元日之次第二法眼トアリ、慶安四 元日次第三刑部卿トアリ、民部卿事トアリ」 「承応四年ヨリコレナシ」
親座敷御免 丹下隼人 親ノ座敷御免 上田織部	親座敷御免 嶋田甚丞 親ノ座敷御免 村井茂兵衛	親座敷御免 丹下隼人 親ノ座敷御免 上田織部
親座敷御免 池永式部 七里縫殿助 西川伝右衛門 中村久左衛門 横田主膳 宇野庄太夫 芝田茂左衛門 北村忠兵衛 松井李允 伊藤一学 川嶋四郎兵衛 竹山九右衛門 山名小兵衛 下橋左兵衛 以上	親座敷御免 嶋田甚丞 親ノ座敷御免 村井茂兵衛 親座敷御免 池永式部 七里縫殿助 西川伝右衛門 中村久左衛門 横田主膳 宇野庄太夫 芝田茂左衛門 北村忠兵衛 松井李允 伊藤一学 川嶋四郎兵衛 竹山九右衛門 山名小兵衛 下橋左兵衛 以上	親座敷御免 池尾主水 上原半左衛門 長治 真方 之勝 昌長 重相 玄好 長正 有茂 可広 三治 正乗 道玄 勝乗 正重 正次 富長 豊友 重成 直好 宗茂 重定 直好
「慶安三寅元日之記 ニ主計内匠事トアリ」 「承応四年ヨリ無之」 「慶安三寅元日次第一 ニ帶刀、内蔵助事」	「慶安三寅元日之記 ニ主計内匠事トアリ」 「承応四年ヨリ無之」 「慶安三寅元日次第二 ニ帶刀、内蔵助事」	「慶安四年春 之記ヨリ無之」 「慶安五年春 ヨリ無之」 「慶安三年元日次第三 池永庄太夫、宇野事」 「慶安三年元日次第四 忠兵衛事、承応四年暮ヨリ無之」 「慶安三年元日之次第二 忠兵衛門、小兵衛事」

承応四乙未年元日

御通出座之次第







廣沢多兵衛

八木伝之丞不參

枝直 定玄

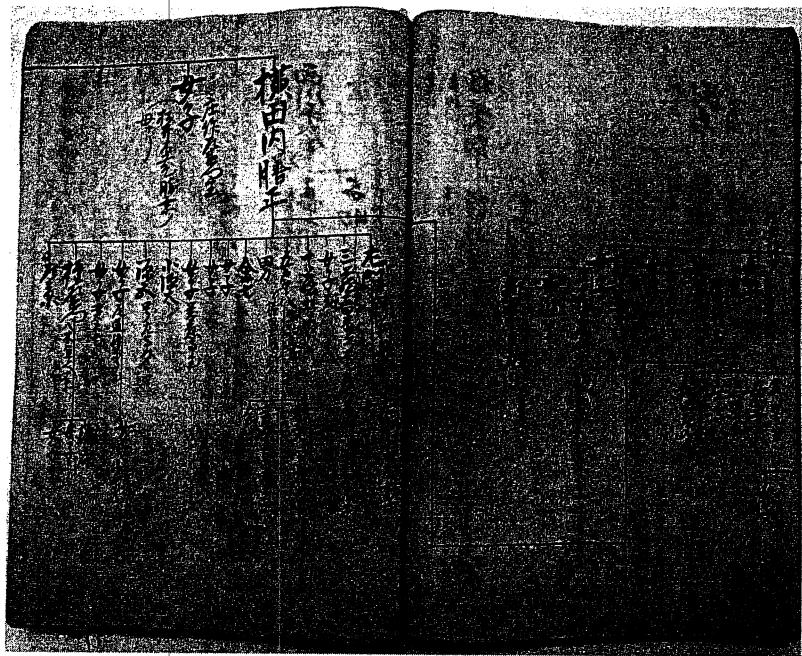
〔寛文十一年ヨリ  
御通ニイツル〕

樺井市之助不參

森庄右衛門不參

以上

## 【史料写真】(本誌五頁下段)



当研究所は、赤松新所長を迎えて、あらたな出発をしました。

今後、研究所は制度や規則を超えたところで、研究所を構成する諸メンバーが個々に發揮する特色と、千葉所長の蹟を受けた赤松新所長の特色が交差して、これまでにない研究所の色を徐々に浮かび上がらすことになるでしょう。その色彩やグラデーションが、教団内外の研究者のみならず、各地の門徒さんたちや地域で活躍されている寺院住職の目にとつて、魅力あるものである必要があると考えています。

本号では、あらたな出発点に立った当研究所を代表して、赤松新所長に巻頭言を頂戴しました。研究生の太田君の史料紹介は、前号からの続きです。もう一回で全冊翻刻にたどり着けるだろうと思います。本頁の上段に系図部分の写真を一枚掲載しましたが、それにしても本誌に掲載した当該箇所と比較してみると、ワープロによる太田君の翻刻が、超が一つでは済まないくらいの力技であることが想像されます。

次号は太田君の史料紹介の残りと、宗門が明治政府からどのような社会活動を期待されたかを示す史料を紹介できるのではないかと考えています。

(歩弥)